

## 入選

### フルーツポンチ

千葉県 御宿小学校 6年 永瀬 麻亜

私の家の近所に、私が小さいころからお世話になっているおばあさんがいた。

そのおばあさんは、90才になってもおかしやジュース、ストラップなど私たち兄妹がよろこぶような物をくれた。おばあさんは一人暮らしで、たまにむすめさんが帰ってくる。

車をもっていないのに、毎日のようにどこかに買いに行っては私たちにくれた。

ある日、お母さんにこんなことを言われた。

「おばあさんにいつもいろいろもらっているから、お返しにフルーツポンチを作ってあげよう。」

私はこの意見に賛成した。けれどお母さんも仕事で忙しく、なかなかフルーツポンチが作れなかった。

そして今年の5月、そのおばあさんは入院した。私は心配で、一週間に3回ほどのペースでおみまいにいった。

初めておみまいに行ったときはびっくりした。しばらく会っていなかったおばあさんは、やせていて、手足も骨のようになっていた。

うでは何本かてんてきがついていて、とても苦しそうにしていた。おばあさんが私に気づいた。たなから何か出そうとしている。何かと思ったらお金だった。そしておばあちゃんの骨のような手が私の手の中にお金を入れた。

500円ほどだったろうか。私の感情がぐちゃぐちゃになった。うれしい、かなしい、くやしい……。けれど、そのぐちゃぐちゃの感情の中でいちばん大きかったのは「くやしい」だった。こんな体になっているのに、私はおばあさんのお世話になっていたのか……。そう思った。

おみまいに行っただけで一ヶ月たった。おばあさんは一日中寝ることが多くなって、耳も前より遠くなった気がした。

もうおばあさんは、フルーツポンチは食べられない。おばあさんの食べ物は、てんてきだけになってしまったから。

そしてあの日、学校から帰ってきた私は、母にこうつげられた。

「おばあさんは亡くなったよ。」

あっさり言われたのもびっくりしたし、何ヶ月か前まで元気だったあのおばあさんが亡くなったことにもびっくりした。

私は自分の部屋にかけこんで、いつまで泣いても泣きたりないのではないかと思うくらい泣いた。そして、こうかいした。でもおばあさんは、病院におみまいに来てもらって、うれしかったのではないかと思う。

生まれ変わって、また近所だったらフルーツポンチを作ってあげたい。